Sherwood Anderson の短編小説における一人称話法の技巧

播磨谷　一　雄

The Technique of First-person Narration in Sherwood Anderson's Short Stories

Ichio HARIMAYA

(平成2年10月31日受理)

Anderson wrote a number of short stories using the technique of first-person narration. In those stories he used such a simple and traditional narrative pattern that a first-person narrator tells his story to the readers. His narrator talks about his experience to the readers, so the readers are expected to become listeners in his short stories. By the method of first-person narration he succeeded in forming a close relation between the narrator and the readers. They can be one with the narrator, and feel the emotions of main characters.

In "I'm a Fool," Anderson tried to develop the theme of the adolescent's initiation into a universal theme, but it seems that he failed in it because of the limitation of the first-person narration. In "The Egg," he gave variety to the last scene by altering the viewpoint from first-person to third-person. The alteration is very effective in completing the climax in the ending of the story. The readers can understand the tragedy of the father, and realize what the author truly intended in this story. In "I Want to Know Why," the theme is very complex to the adolescent narrator, and the author's intervention in him is frequent. But in the ending the author separates from the narrator, and gives the thematic question to the readers, which causes a kind of dramatic effect.

In a first-person narrative, one of the important points is how the author uses the merits and how he deals with the shortcomings. It seems that Sherwood Anderson made the best of the technique of the first-person narration in his short stories, understanding these points quite well.

1

アンダソンは彼の短編小説において，語り手を一人称とする技法を多用している。彼の三つの主要な短編集 *The Triumph of the Egg, Horses and Men, Death in the Woods* におけるその利用の仕方をみると，これらの中の全短編小説31中，実に21がこの方法を用いているのである。従って一人称語り手は彼の短編小説の特徴の一つといえる。彼がなぜこの技法を多く使用したかについては，宮本氏が述べているように，[1] 彼の小説は，彼がかねがね「偉大な語り手」と呼んでいた父の話法に基本的に基礎を置き，活字ではなく語るテクニックから生まれたとする考えが，短編小説の場合にも当てはまるように思われる。聴衆を前にして語る場合には，語りの調子を強めたり，繰り返しを用いたり，また時には横道にそれたりすることによって聴衆を引きつけなければならない。彼は彼の一人称語り手の短編小説においてもそれと同様な技巧を用い，読者に親近感や作中人物との一体感を与えて，作中人物の感情生活へと読者を引き込もうとしている。そのためには「私」の語る物語は最適であり，作者の意図に

そうものであったように思われる。

小説における一人称の語り手，即ち「私」により語られる物語について，サーメリアンはその著書，「小説の技法」においてその長所，短所について詳細に述べているが，その中で次の箇所に最も注意が引かれる。

> 主人公が「私」として語る場合（I-as-hero），物語は主人公の行動や反応を通して劇化され，主人公は事件に対して自分なりの限られた判断を下す。そして読者は主人公の知識の及ばない点を補って読むことができる。...読者は登場人物自身から直接に情報を得るのであって現場に居あわせない語り手から間接的に得るのではない。...読者に親近感を与え，容易に作中人物との一体感を覚えさせ，作中人物の感情生活へと読者を引き込んでいく。[2]
> 自分の物語を語る主要人物の姿は，彼の目を通して描かれるマイナーな人物たちの姿に比べてしばしば具体性に欠けることがある。即ち彼は自分を外側から見ることができない見物者なのである。一人称＝主人公の方法は，観察する眼をもった人物としては問題はないが，観察される側の人物としては適していない。[3]

長所については，サーメリアンの述べていることで言いつくされているように思われるが，短所について岩元巌氏の論文から次のように引用し補足する。

> 最も大きな問題は，語り手の体験から物語を構成させるということを厳密に作者が守ろうとした時，物語の叙述には常にある種の限界がつきまとうことである。小説の中の語り手を確固として定めれば，生じた出来事を見る視点もまた固定してしまい，小説はかぎられたヴァージョンにとどまってしまう。しかし，一方では，聞き手の側は語られる出来事の全体像を得たいと考えるのが通例であるから，作者としては語り手のヴァージョンを何らかの方法で拡大し，あるいは補足する必要にせまられる。だが拡大や補足によって，小説そのものの現実性を損なうことはできないのであるから，作者としてはどうしても物語の展開に制約を受けることになる。[4]

前述のように，アンダソンは一人称語り手の長所を大いに利用し，聞き手である読者を語り手である「私」の感情生活に引き込んでいったように思われるが，彼が短編小説においてその技法をどのように効果的に利用し，また短所をどのように解決したかが小論の第一の検討項目になる。また，第二として彼の短編小説における「作者」「語り手」「読者」これら三者の関係についても考察したい。小論では主に *I'm a Fool* と *The Egg* について検討する。

2

最初に短編集の一つ，*Horses and Men*の中の *I'm a Fool* [5]を取り上げ，前述の観点から検討を加える。この短編では１９才の少年が語り手であり，彼が事件の主要人物となって，自らの未遂に終わった恋の物語を語る場合である。作者は語り手が実際に語ろうとする事件に入る前に周到に準備段階をとり，具体的な語り手像を読者に印象づけ読者が「私」に移入できやすいようにする。

まず，この短編の全編を支配する語り手の口調は語り手の仕事や年令を反映して，俗語が多く使用され口語表現が多い。特に語り手が興奮して話す時には，Gee whizz,...やGee whizz Gosh amighty,..., Gee whizz, craps amighty[5] などの口語的な間投詞が多い。これは語り手が聞き手を前にして，その語りの調子を整える効果があり，聞き手としての読者に語り手の感情を直接的に表現することにより親近感を与える。また文法的な誤りが数カ所見られ，故意に誤ることにより，この少年の教育程度も示している。そして話が横道にそれそうになった場合の修正も巧みに行われ，But that isn't what I want to tell my story about.[7] とか I'm only telling you to get everything straight.[8] などの言葉を挿入して，周辺を描きながら次第に核心に迫っていく方法は，一人称語り手の利点を生かし聞き手としての読者を意識した巧みな誘導といえる。次に語り手の価値観について述べる際には，まず母や姉の反応を示すことにより客観的な「私」像を読者に提示し，その後で語り手の考えを示す方法をとる。19才の少年である語り手が臨時に働いている競馬の仕事，馬丁についての母や姉の考えは次の通りである。

> They both thought it something disgraceful that one of our family should take a place as a swipe with race horses.[9]

この考えは，馬丁という仕事に対する単に母や姉の考えだけではなく，少年の属する社会の一般的な社会通念を示している。読者は馬丁という仕事はこの

少年が属していると思われる中流階級の子弟が選ぶべき仕事ではないことを知り得る。その後でこの社会通念に敢えて反対しようとする少年の明確な態度が示される。少年は競馬の仕事とそれに付随する状況を，普通の家庭で育ち高校や大学に進学する者には経験できないすばらしいことだとし，同僚の黒人Burtや競争馬，レース会場への旅などに最大の価値を置いている。レース会場で着飾って観覧席にいる人々に対し，

Such fellows don't know nothing at all. They've never had no opportunity.[10]

とさえ言い切り，

...you'd find out about horses and men and pick up a lot of stuff you could use all the rest of your life, if you had some sense and salted down what you heard and felt and saw.[11]

と判断し，現在の置かれている競馬の世界に人生における最高の価値を見出そうとする。それはこの少年の持つ限られた価値判断を示すものである。

一方，マイナーな人物たちの描写は，この物語の成立上，十分であるかという点で検討を加えると次のようになる。マイナーな人物たちの描写は，少年の目を通してしか語られないためにかなり制限されたものになる。即ち，彼らについては物語の展開に必要な部分しか描写されない。例えばホテルのバーで会った若い男に対する不快感が述べられるが，その男についての描写は次の通りである。

In the bar there was a fellow with a cane and a Windsor tie on, that it made me sick to look at him. I like a man to be a man and dress up, but not to go put on that kind of airs.[12]

ここには若い男の外見上の服装や態度についての「私」の感情があるだけで，具体的な不快感を与えるような行動の細部についての描写はない。読者は「態度が気にくわない」という「私」の不快感を想像で補うことが要求されている。

また，「私」に直接に関係してくる若い男と二人の女のグループについても，描写は簡単である。

The young fellow was a nice guy all right. He was the kind maybe that goes to college and then comes to be a lawyer..., but he wasn't stuck on himself.[13]

と述べ，即座に彼はnice guy であると判断している。そして先に大学を目指す者について述べた反感の言い訳のように，

There are some of that kind are all right and he was one of the ones.[14]

と説明している。また彼が一目で好きになってしまう少女の身分や育ちについて，独りよがりの推測がある。それは彼女の態度や言葉使い，服装に基づくものである。

I think maybe her father was well-to-do, but not rich to make her chesty... Maybe he owned a drugstore...[15]

このことは後で確認されることはなく，彼らが上流階級に属しているという前提で物語は進行する。読者はこのような「私」の限られた判断に従うしかなく，「私」の知識の及ばない点は補って読まなければならないのである。即ち，マイナーな人物の描写については，作者は読者に多くの要求をしているといえる。

以上のように，語りについては少年の口調が全編を支配し，一人称語り手の利点が十分に生かされ，背後にいる筈の作者の声が拡大や補足になって不自然に目立つことは殆どなく，ほぼ完全に統一されているようにみえる。また主要人物の具体性に欠ける面については，具体的な「私」像を読者に提示することにより，一人称小説の欠点を補おうと努力している。そして作者は殆どそれに成功しているようにみえる。しかし，この作品の場合は文体の統一性の成功が必ずしも作品の成功を意味しないように思われる。テーマとの関連でこの点を検討すると，文体の統一性がテーマの発展に寄与したかが問題になる。この場合のテーマはDavid. D. Anderson が述べているように[16]外見と真実である。少年は見せかけを重視する社会基準に強い反発を示し彼独自の価値観を持つが，結果的には自分の信条を捨て社会基準に従うことになる。彼がホテルのバーで会い，極端な嫌悪感じた洒落れた身なりの若い男と同じことをすることになるのである。少年は見せかけとしての服装を整え，身分を偽って少女やその同伴者と付き合うが，最終的には彼は嘘をついたために少女とのその後の交際を絶たれ，後悔と困惑の状態に残されることになる。彼の信ずる真実と社会基準としての見せかけの間で困惑の状態にあるこの少年の悩みが，単に少年の限られたヴァージョンとしての悩みにとどまらず，一般的な社会の普遍的な問題にまで高められているかが問題になる。

作者が入念に工夫して文体の統一性に成功すればするほど，この物語を19才の少年に限定された普遍性のない作品にしているように思われる。語りの固

定化は物語に統一をもたらし読者との一体化をしやすくする反面，前述の引用にあるように語り手個人のヴァージョンに偏り過ぎる面も出てくるのは避けられないように思われる。確かに作者は母や姉の目を通して馬丁という仕事を眺めさせることにより，また時には語り手に少年らしからぬ言葉を話させることにより，視点が個人の限られたものに陥ることを防いではいるが，それはあくまで部分的な工夫であり，視点の固定化がこの物語の主要なテーマに及ぼす影響については，問題があるように思われる。この物語のテーマは見せかけと真実，あるいは嘘と真実であり，作者の意図は単に少年の世界だけに終わらず，普遍的に例えば絶望と挫折の問題まで高めることにあったと思われるが，この作品に関してはその意図が十分に達せられていないように思われる。作者は一人称小説の限界を完全に取り除くことができず，語り手の体験の物語は少年のイニシエーションの物語として終わるのである。

3

*Fool*の語り手は19才の少年であったのと同様に，*The Egg*の語り手も若年であることが想像されるがその職業や身分には言及されず，前者の場合のような文体の制限を受けず，語り手はより自由に作者と同じレベルで語ることができる。語り手「私」は過去の両親との生活について語るが，その際の「私」は子供であり，事件の当事者というよりは両親の観察者に過ぎない。語り手は過去の幼少の時代の出来事についての意識や記憶の不明確性を想像力によって，いわば物語の進展に都合のよいように，補足，拡大できる立場にある。即ち，作者は必要な時にいつでも語り手と一体になって，物語の現実性を損なわない程度に補足や拡大ができるのである。

作者は*Fool*の場合と同様に，語り手が読者にとって興味ある人物であるように語り手像を形成しようとする。語り手は両親が野心を持ち，養鶏業を始め失敗に終わった経緯を語りながら，自らに養鶏業が与えた影響について次のように述べる。

> I grew into boyhood on the place and got my first impressions of life there. From the beginning they were impressions of disaster and if, in my turn, I am a gloomy man inclined to see the darker side of life, I attribute it to the fact that what should have been for me the happy joyous days of childhood were spent on a chicken farm.[17]

この言葉は，語り手が人生の暗い面を見がちな男というイメージを読者に与え，読者に語り手の人生に対する視点を提示するものであり，またこれから語られる話が悲劇的なものであるということを読者に暗示する。さらに語り手は卵－雛鳥－成鳥というサイクルを恐しいと言い，読者の持つ雛鳥が可愛くて明るいというイメージを完全に否定し，“...they are in fact so dreadfully stupid.”[18]と断言する。さらに卵から成鳥までのサイクルの中で実際に成鳥になるのはわずかに過ぎないとし，読者に養鶏業の暗い面を提示する。そして鶏について書かれたものを信用するよりは，アラスカの金鉱や政治家の誠実さを信用する方がましだと皮肉を交えて警告する。このように，雛鳥についての一般的なイメージを否定することにより意外感を形成し，さらに皮肉をこめた語り手のコメントでそれを締め括ることにより，語り手が読者にとって新鮮で興味ある存在になるように工夫している。このような語り手の自信を持った語り口は，読者に信頼感を与え，物語の真実性を増大させるものであり，それにより語り手は，事件を自分のものとして語ることができる足場を築いているといえる。

次に一人称小説によく見られる補足や拡大に注意していくと次のようになる。両親が食堂を始め，父が客をもてなす（entertain）という考えを思いつき，語り手がその説明をする必要が生じた時，

> I cannot now remember his words, but he gave the impression of one about to become in some obscure way a kind of public entertainer.[19]

という表現を用い，無理のない補足になるように工夫している。また父の考えを広げ過ぎたと感じた時には，次のように述べ読者の了解を得る。

> I do not mean to give the impression that Father spoke so elaborately of the matter. He was, as I have said, an uncommunicative man.[20]

また，客といさかいを起こして二階に上がってきた父に対する母の態度を述べる時に，...I can remember... I have forgotten..[21]と述べ，記憶していることと，忘れたことを都合よく選択し，補足している。このように作者は語り手自身の記憶が曖昧であり，父が寡黙な人という設定をもうけ，一人称語り手が拡大や補足しやすいような環境を作り出し，父の行為の代弁者となる。

しかし，一人称小説の場合は，語り手が固定化されるため，全ての場面に居合わせることができない場合が生じる。子供であり二階で母と寝ていた語り手は，階下での父と客のJoe Kaneの最後のクライマックスの場面に居合わせることができない。そのために語り手は，My own imagination has filled in the blanks.[22]と先手を打ち，読者に補足，拡大の許可を求めている。次に，階下で起きた事件について詳述しなければならなくなった時には，次のように言い訳する。

> As to what happened downstairs. For some unexplainable reason I know the story as well as though I had been a witness to my father's discomfiture. One in time gets to know many unexplainable things.[23]

次に語り手の想像で語られる階下での父と町の若者Kaneの場面が続くが，この部分は一人称の語り手では述べられない拡大された場面である。そのために一人称物語中の三人称物語のような形になり，「私」の介入は全くなく会話文を含み，三人称で述べられる。そして父が卵を握りしめ，興奮して二階に上がってくる場面に戻る。

「時がたてば，たくさんの訳のわからないこともわかってくるものだ」という前置きで始まる父とKaneの場面は，視点の変更の無理な言い訳のように思われるが，それまでの作者の準備が周到であるために，あまり奇異な感じはない。作者はこの場面に至るまで，語り手に父親像についても十分に語らせ，その父親像はこの場面での父のグロテスクな行動と一致するものである。そのために読者は内容の点からも一貫性を感ずることができる。読者はこの場面により，父の卵による悲劇的な敗北をより具体的に知ることができる。この場面は一人称小説の視点の固定化を防ぐ意味でも，また最後のクライマックスを形成する点からも，作者にとって是非必要な部分であったように思われる。そこでは語り手は作者と一体化し作者全知の視点をとり，自由な観察眼で父とKaneとの次第を読者に具体的に提示する力を得ている。語り手はKaneをentertainしようとする父の奇異な行動と彼の心理状態や，またその受け手としてのKaneの心理的反応をこの方法で十分に描写することができたのである。それは本来，一人称小説では取り得ない方法である。作者のこの試みは失敗すれば小説そのものの現実性を損なう恐れのある試みであったように思われる。実際はこの試みにより，この作品は一人称小説の限界を超え，重層化しているといえる。

この場面の後，物語は一人称小説の形式に戻り，語り手は再び少年時代の記憶を述べ，卵に対する素朴な疑問を提示する。

> I wondered why eggs had to be and why from the egg came the hen who again laid the egg.[24]

ここには語り手が少年期に感じた卵の存在や，卵－成鳥というサイクルに対する素朴な疑問が述べられているが，語り手はさらにAt any rate, the problem remains unsolved in my mind.[25]と言葉を続け，少年期の疑問が成長した語り手の現在に至るまで継続していることを述べる。語り手は時間の幅を利用して，読者にまず過去における父と卵の争いを示し，その後で再び読者を現在に戻している。語り手にとっては語っている現在も，卵，即ちその象徴するものの一つである人生の秘訣を把握し理解することが不可能なのである。このことは読んでいる（聴いている）読者に対しても現実のものとして訴える力を持ってくる。そのためにこの物語は単に語り手の父の悲劇や語り手の幻滅を表わすだけでなく，人間が自然を支配し理解しようとすることは失敗する運命にあるという普遍的なテーマを表わすことになる。

4

アンダソンは一人称小説の物語を始めるにあたりまず語り手である「私」像を読者に提示し，それが読者の主要な情報源となり，読者はそこから必要な情報を得，登場人物の性格の輪郭を描くことができた。この方法により語り手は読者から信頼を得，語り手と読者との一体化をはかることができた。それをさらに容易にしたのは，読者を「聴き手」と考えた語り手の「語る」という方法である。アンダソンの短編小説の中には，若年の語り手が主人公になり一人称で語る場合が多いが，これらのいずれも語り手の年令や身分に合わせた文体を守っている。中でも*Fool*の場合がその点では厳密なものであった。このように語り手の環境に応じた口語体の言語を駆使することにより，アンダソンは一人称話者の驚きや興奮，失望などの感情生活に読者を見事に溶け込ませ，一体化させる独特な話法を持っていたように思われる。

その話法で読者に伝えられる情報は，必ずしもその物語の進展にとって必須なものではなく，挿話の

ように物語の本筋から横道にそれるようにみえることが多かったように思われる。例えば，Foolにおいて，語り手の少年の話は競馬場であったすてきな少女の話から，About Ben Ahemという競走馬の話になり，それが馬主のMr.Mathersの話に発展し，次に少年の同僚の黒人Burtのことに移る。そして先述のような場面の転換をはかる言葉で，以前の物語の本筋に戻るのである。読者はこのような一見，無作為にみえる挿話を読むことにより，知らず知らずのうちに作者の技巧に引き込まれていくように思われる。アンダソンの無作為にみえる挿話は実際は周到に用意されたものである。先述の例の場合に，その挿話は少年がなぜAbout Ben Ahemのことをよく知り，その馬主の息子という嘘をつけたかというこの物語の重要な伏線となっているのである。アンダソンはそれ以上述べると，物語の進展や真実性が損なわれる限界を心得ていたように思われ，その場合の話題の転換もまた巧みだったのである。

アンダソンの語り手と読者との関係について，Irving Howe は次のように述べている。

> Anderson's narrator senses that in the seemingly simple act of telling his story he enters into a highly complex relation with his audience and that, as one able to shape both the materials of his narrative and the responses of his listeners, he is momentarily in a position of great power.[26]

ここで述べられている語り手と読者の複雑な関係は語り手が読者の中に物語の主人公と同じ体験を経験させるような心理状態を作り出すことにより可能になるように思われる。その結果，語り手は聴き手である読者の反応を確かめながら，自在に物語を進展させサスペンスを作り出す大きな力を持ち得るのである。一方，読者は語り手のこのような技巧により登場人物の心理的な現実を現実のものとして受け取らざるを得ないから，人物が現実的に印象づけられることになる。一人称の語り手による方法は先述のように種々の問題点はあるが，アンダソンが目的とした語り手と聴き手である読者との一体化という点においては，単純ではあるがもっとも効果的な方法だったといえる。アンダソンが一人称小説の方法を多く使用したのはこのような理由によると思われるのである。

１章の引用でのべたように，一人称小説は読者と登場人物との一体感を主要な目的とし，語り手の限られた視点から語られるものである。それを物語の現実性を損なわない程度に補足し拡大していくためには，作者の頻繁な語り手あるいは登場人物への介入が必要になる。この作者の介入と分離が一人称小説の成功の鍵となる場合がある。*Fool*の場合のように作者の介入があまりないほぼ完璧な一人称小説を作り上げようとすると，個人のヴァージョンに落ち込むことになる。*The Egg*の場合は，先述のように視点の転換によりその欠点を克服しているばかりでなく，最後の部分で卵－成鳥というサイクルについての読者への問いかけがある。語り手はその疑問を読者に投げかけることにより，陰の存在である作者から分離し，独立した存在になる。読者はこの問いかけにより，疑問の背後にある人間と自然の問題に必然的に目を向けることになるのである。

*Fool*と同様な競馬ものを扱い，やはり少年の語る*I Want to Know Why*では，語り手の少年を通しての作者の介入が多く，文体の不一致な点も批評家により指摘されている。しかし，最後の部分で語り手の少年を優秀な調教師であるJerry Tillfordのとった意外な行動についての失望と幻滅，困惑の状態に置き去りにすることにより，作者は語り手から完全に分離している。少年は大人の性の力について無知で困惑しているが，読者はそれを理解しているのである。アンダソンのこのような読者に疑問を投げかけるいわば劇的な方法は，読者に過大な要求を与えるものであるが，語り手と読者の関係が良好であればこそ可能になったのである。このように一人称小説の長所や，陥りやすい欠点を承知しながら，アンダソンはその技巧を十分に利用したように思われる。彼の短編小説は基本的に「語り」に基礎を置いているために，彼にとってこの方法が最も語りやすく思われたからであろう。

注

1．大橋吉之輔編「20世紀英米文学案内アンダソン」（研究社，1968），pp.197-198
2．レオン・サーメリアン，「小説の技法」浅田雅明他共訳（旺史社，1989），pp.110-111
3．Ibid., pp.123-124
4．山形和美他編集「小説の語り」（朝日出版社，1974），p.50
5．以後 Fool とする。
6．Maxwell Geismar,ed., *Sherwood Anderson: Short Stories* (New York: Hill and

Wang,1968),p.44
7. Ibid., p.45
8. Ibid., p.48
9. Ibid., p.43
10. Ibid., p.44
11. Loc. Cit.
12. Ibid., p.47
13. Loc. Cit.
14. Ibid., p.46
15. Ibid., p.47
16. David D. Anderson, *Sherwood Anderson* (New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1967), p.72
17. Geismar, op. cit., p.21
18. Ibid., p.22
19. Ibid., p.25
20. Ibid., p.26
21. Ibid., p.27
22. Ibid., p.26
23. Ibid., p.27
24. Ibid., p.30
25. Loc. Cit.
26. Irving Howe: *Sherwood Anderson* (California: Stanford Univ. Press, 1966), p.148